

岡山県津山市の町並調査

建造物研究室

わが国の歴史的町並の調査は、全国各地で行われ、その保存もようやく軌道にのってきた感がある。なかでも中国地方は質のよい町並にめぐまれ、すでに重要伝統的建造物群保存地区に選定された全国25箇所のうち、6箇所を占める。岡山県では倉敷と吹屋（成羽町）がそれで、その他に大原（大原町）が調査されているが、ここに卓越した城下町の一例を加えることとなった。中国山地に抱かれた県北東部、吉井川沿いの盆地の町、津山である。

津山は、近世美作国の中心である。その端緒は、慶長8年（1603）の森忠政の入部にあり、まさに純然たる近世都市そのものの成立ちを遂げている。城下は、城を中心に武家地、町人地、寺社地が明確に区分されており、そのいずれもが比較的良好に現代にまで受け継がれて、全体として近世の町割をとどめている点に津山の特長がある。調査対象地区となった城東地区は、城下に取り入れられた出雲街道沿いの町人地であり、現在最もまとまって伝統的町家が残る。

城東地区は6町からなり、宮川を隔てた津山城寄りの橋本町から林田町・勝間田町までがまず慶長・元和年間に形成され、ついで中之町・西新町・東新町が寛永・正保年間に組み入れられた。城下全体が完成したのは寛文頃と推定され、現存最古の城下絵図（正徳年間）にその姿をみる。城東6町の北に広がる武家地である。上之町から6町に13条の小路が通り、享保の絵図ではそれぞれの名前が知られる。この間、藩主が森家から松平家に替わり、禄高の減少に伴って人口も半減しているが、町人地については幸いにもその絶頂期というべき時の記録「美作国津山家数役付惣町堅横貫貫橋改帳」（元禄10年）が残り、町割の詳細と町役（家役）の様相を知ることができる。これによると城東6町には米屋や紺屋などの商人、鍛冶を中心とした職人が居住していた。町割を知る史料は多いとはいえないが、幕末・明治期の絵図や地籍図、さらに現状と比較するとおおむね細分化の傾向をたどっている。地子を免除される代わりに掃除や火消しなどを課せられる町役は、おそらく当初の町割の一筆にたいして本役（一軒役）をあて、以

降敷地の分割・統合にかかわらず総数を一定に保った。したがって当初の町割もほぼ復原でき、当初の一軒の間口は5間前後が標準であるが、現在では3～4間のものが多い。

町家の平面は一列三室形を基本とし、ミセノマ前面にマエニワをとるものも多い。架構の特色は、一階正面から半間入った位置、すなわち二階前面の柱の位置に桁行に大きな梁をかけることで、今回の調査ではこれを「胴差梁」と仮称した。正面は一階を大戸とシトミないし格子、二階は出格子と腰ナマコ壁による構成をとるものが典型的で、近世から明治末にまで引き継がれた。大正以降は二階の建ちが高くなって真壁とすることは他地域と全く同傾向である。建立年代は、18世紀にさかのぼるものは150余棟の調査家屋のうち十指に満たず、幕末・明治期のものが主体となっているが、東新町には比較的古い時期の町家が集中して残り、また勝間田町には大規模な酒造の町家を中心とした美しい景観を見ることができる。全体として延長1km余り、約六割を占める伝統的な町家による町並は、全国的にみてもすぐれたものと言えよう。以上の調査成果は『津山城東の町並』(津山市 平成元年12月)として刊行した。(松本 修自)